祝 高島藩主諏訪家墓所 国史跡指定

高島藩初代藩主諏訪頼水の墓は、ちの上原の頼岳寺にあります。

ここには、頼水の両親である頼忠と理昌院の墓もあり、一つの建物（御霊屋）に祀られています。建物周辺は、「諏訪氏頼岳寺廟所」として茅野市の史跡に指定されていたところです。

このたび、平成28年11月18日に国の文化審議会が、国史跡に指定するよう松野文部科学大臣に答申し、平成29年2月9日付けで「高島藩主諏訪家墓所」の名称で約211平方㍍が国史跡に指定されました。

今回は、国史跡に指定された範囲にある主な建物についてご紹介します。

御霊屋遠景

高島藩主の墓

高島藩主の墓は、初代頼水とその両親である頼忠・理昌院の墓所が上原頼岳寺にあり、2代藩主忠恒から8代忠恕までの墓が上諏訪温泉寺にあります。

温泉寺の墓所も諏訪市の史跡に指定されていました。今回の史跡指定は、諏訪市上諏訪の温泉寺にある藩主の墓地約1283平方㍍との一括指定です。

茅野市の史跡

茅野市の史跡としては、特別史跡「尖石石器時代遺跡」、史跡「上之段石器時代遺跡」、史跡「駒形遺跡」に次いで4件目となります。

これまで茅野市は、八ヶ岳山麓を中心とした縄文時代の遺跡に注目が集まっていましたが、諏訪大社上社前宮などとともに、古代や中世においても諏訪地方の中心地であったことが理解されます。

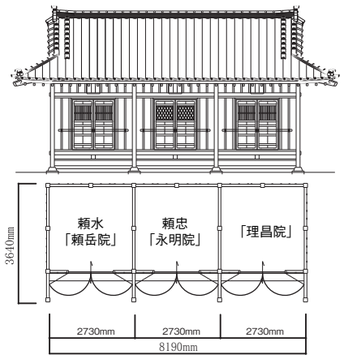
頼岳寺

頼岳寺は、初代藩主頼水によって、寛永8年（1631年）に開基されました。

御霊屋および家臣団の墓所は頼岳寺本堂の左手の石段を上ったところにあります。御霊屋は石段を上った正面にあり、3室に分かれ、左側に頼水（頼岳院）、中央に父頼忠（永明院）、右側に母理昌院が祀られています。

御霊屋は、頼岳寺の記録から、安政6年（1859年）に再建されたものと考えられます。

今回の指定は、諏訪家廟所のみの指定ですが、頼岳寺の廟所周辺には諏訪家を支えた家臣団の墓地も多く残されていて、江戸時代初期の藩主と家臣団の関係を示す資料としても、貴重なものです。



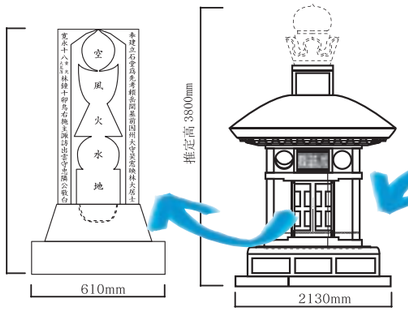
御霊屋

御霊屋全景

頼水廟

頼水廟は、安山岩製で、基礎の上に築かれ、下から基壇、柱と壁・扉を構成する建物本体、宝形造りの屋根、露盤と宝珠から構成され、内部に石碑が安置されています。最上部の露盤と宝珠は御霊屋の天井の上にあり、観察することができないため、同形式の石廟である妻貞松院の石廟を参考に復元実測をしました。

内部の石碑には、五輪塔が描かれ、右に頼水の法名、左に石廟を建立した忠隣（忠恒）の名が刻まれています。



石　碑　　頼水廟実測図

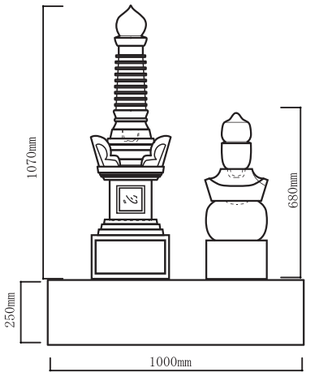
頼水廟外観

父、頼忠・母、理昌院の墓

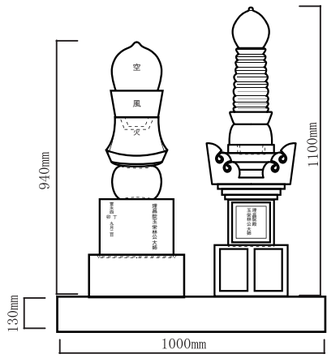
父頼忠の墓室内には基壇の上の左側に宝篋印塔、右側に五輪塔が建てられています。また、母理昌院の墓室には基壇の上の左側に五輪塔、右側に宝篋印塔が建てられています。どちらも宝篋印塔と五輪塔が対をなしていますが、位置は左右反対となっています。

頼忠は最初永明寺に葬られましたが、寺が破却された後に頼岳寺に改葬されました。

また、理昌院の墓は上原城下の理昌院平にあったものを頼岳寺に改葬したとされていますが、頼水の御霊屋を作った際に移したものと考えられます。



父　頼忠の墓

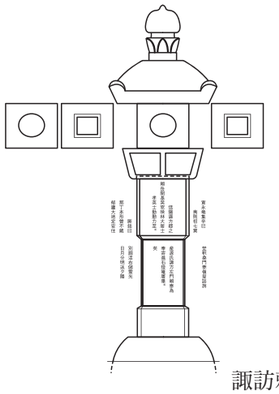


母　理昌院の墓

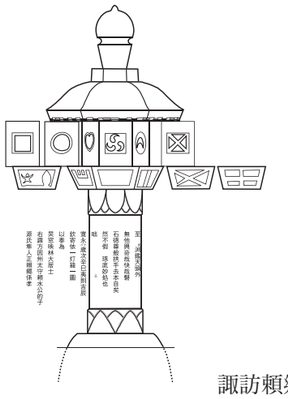
6基の石灯籠

御霊屋の頼水廟の前には、6基の石灯籠が奉献されています。このうち3基は頼水の子が奉献したものです。頼郷と頼泰（頼長）は、早くから松平忠長（徳川家光の弟）に仕え、その後旗本となっています。頼孚は頼水の家督を継いで2代藩主となった忠恒の家臣として諏訪家に残ります。

この御霊屋前には、2代藩主忠恒の奉献石灯籠が見られません。これは、頼水の石廟を建立したのが忠恒であるため、石灯籠の奉献は行わなかったものと考えられます。なお、石廟内の石碑には、諏訪出雲守忠隣とあり忠恒ではありませんが、諏訪藩主で出雲守の官位をもつものは忠恒だけであるので、忠恒の別名だと考えられます。



諏訪頼泰



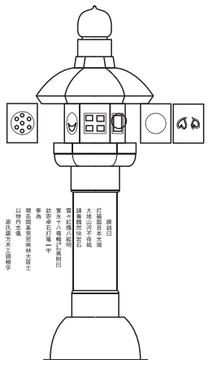
諏訪頼郷

残りの石灯籠は、小沢主膳、井手宗順、牛山勘右衛門が奉献したものです。

小沢主膳は頼水の家臣で、頼水の娘（養女ともいう）を妻としています。

井手宗順は藩医として頼水に仕え、高島藩に配流となった松平忠輝（家康の6男）の世話もしています。

牛山勘右衛門の奉献石灯籠は、銘文に芳志院殿とあることから、別の場所から移されたものと考えられます。灯籠に記された年号も、「享保」と、およそ100年ほど後のものです。



諏訪頼孚

牛山勘右衛門

井手宗順

小沢主膳

墓所は、頼岳寺が管理しています。
自由に見学できますが、周辺の墓などを荒らさないようにお願いします。